

Michael F. Laffan

Islamic Nationhood and Colonial Indonesia:

The umma below the winds,

RoutledgeCurzon, London/New York, 2003.

本書は、著者が 2000 年にシドニー大学に提出した博士論文をもとに加筆訂正したものである。

まず本書の内容を簡単に紹介する。序論で著者は、インドネシアのナショナリズムにおけるイスラームの位置付けを再考する必要性を主張し、本書の目的を「一部のインドネシア人たちが、より広いイスラーム世界との関係の歴史をふまえて、どのようにして自分たちのイスラーム的アイデンティティを表明してきたかを描く」こととしている。第一章では東南アジアのイスラーム化の歴史を概観したうえで、イスラーム世界において東南アジアがひとつのまとまりとして認識されていたことを示し、これをジャウィ世界(Jawi ecumene)と名付ける。第二章では、19 世紀のオランダ植民地支配とイスラームの関係が概観される。第三章では、19 世紀末のメッカにおける東南アジア出身者の諸活動を描写し、「ジャウィ世界」意識(Jawi ecumenism)の展開過程を論じる。第四章では、倫理政策下の植民地政府のイスラーム政策を分析し、親オランダ的な東インド・ナショナリズムの出現を論じる。第五章では再びメッカの状況に筆を戻し、改革主義的なアフマッド・カティブの影響による変化を論じる。第六章では、カイロを中

心に展開したいわゆる改革主義運動の言説とその「ジャウィ世界」への影響が論じられ、続く第七章ではこれとの対比において東南アジアにおけるジャウィ文字による出版活動の分析がなされる。第八章ではアグス・サリムの思想などの分析を通して、インドネシア人たちが自らを一つのネーションとしてイスラーム世界の中に位置付けていったことが論じられる。第九章および第十章では結論として、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、インドネシアのムスリムたちの自己認識が「ジャウィ世界」意識からナショナリズムへとシフトした、とされる。

本書の特徴としてはまず、近年進められてきた東南アジアと西アジアの両イスラーム地域間の交流を扱った諸研究の成果を利用しつつ、これをナショナリズムの問題にひきつけて具体的に論じた点があげられる。オランダ語、アラビア語、インドネシア語の諸史料を駆使して多岐にわたる問題が論じられており、インドネシアのナショナル・アイデンティティの形成過程においてイスラームが与えた影響の大きさが説得的に主張されている。また、ナショナリズム以前におけるアイデンティティのあり方として著者が提示している ecumenism という概念も、その意味内容は必ず

しも明確にされていないが、興味深い視点を提供している。

ただし幾つかの問題点も指摘できる。本書はインドネシアにおけるイスラーム的ナショナリズムの展開を論じているが、ナショナリズムをめぐる従来の議論との関連性はあまり論じられていない。西洋志向の世俗主義的ナショナリズムとイスラーム的ナショナリズムの相互の関係は不明確なまま

であり、結局、現在のインドネシア国家におけるイスラームの位置付けを論じるまでには至っていない。また叙述を 1920 年代までで終えているのもやや唐突で、尻切れトンボの印象が否めない。

とは言え、まだ比較的研究の進んでいない分野でもあり、今後の研究に先鞭をつけるという意味で、本書の意義はきわめて大きいと言えるだろう。(國谷徹)

Abdul-Razzaq Lubis & Khoo Salma Nastion,

Raja Bilah and the Mandailings in Perak 1875-1911,

MBRAS (Monograph 35), 2003.

本書は、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのペラク南部・キンタ溪谷地域のマンダイリン人コミュニティの歴史とその首長ラジャ・ビラーの生涯(1834?-1911)を軸に、この地域の社会変容を描いたものである。

本書は夫妻による共著であるが、夫のアブドゥル・ラザク・ルビスはマンダイリン人の出自でラジャ・ビラーの子孫であり、彼が中心となった現地調査による史料収集およびインタビューの成果をまとめたものである。

マンダイリン人とは、スマトラ北部のバタック人の支族である。オランダのスマトラ支配の拡大を契機にマレー半島への移住を進めたマンダイリン人は、19 世紀後半のマレー半島各地の内戦では戦士として重要な役割を果たしたが、イギリ

スによる植民地化を契機に内陸部の鉱山、農業開発を担っていくことになる。ペラクにおいては、マンダイリン人首長ラジャ・アサル(Raja Asal)が 1875 年のイギリス人理事官殺害事件の鎮圧に貢献してイギリス人行政官との関係を築き、キンタ溪谷のパパン(Papan)での定住を認められ、そこにマンダイリン人コミュニティが形成された。1877 年にラジャ・アサルが死去するとその甥ラジャ・ビラーが跡を継ぎ、同年イギリス政庁からブンフル(Penghulu)としての認定を受けて植民地行政官となり、1911 年に死去するまでそこでのマンダイリン人コミュニティの代表者として、この地域の行政と開発に大きな役割を果たした。

本書の何よりの特徴は、在地史料の利用である。ここで主に利用されているのは、パパンのラ

ジャ・ビラーの邸宅に所蔵されていた植民地行政記録や個人の手紙などの史料である。従来の植民地期の研究は植民地政庁に集積された英語史料に依拠するものが大半であり、ジャウイ(アラビア文字表記のマレー語)を中心とする在地の史料をこれほど大量に利用した研究はあまり例がない。こうした史料の紹介が本書の主眼の一つであり、本文中に写真や地図を含めた史料の掲載に大きなスペースが割かれているのである。

本書は、あわせて 27 の節に分かれているが、それぞれの節は独立性が強く、様々なトピックに関しての短い叙述の集成といった形式である。それらは二つのテーマに大別される。第一に、マンダイリン人の移民から定着に至る過程についてである。そこでは、スマトラからの移民ルート、1870、80 年代の錫鉱山開発、90 年代以降の農業開発、20 世紀初頭のマンダイリン人ネットワーク、メッカ巡礼といった項目が取りあげられている。第二に、在地社会における植民地行政のあり方

についてである。そこでは、錫の輸出関税の徴収、宗教行政とモスク建設、裁判権といったラジャ・ビラーの植民地官吏としての職務と権限が具体的な事例に即して叙述されている。

本書は、論理を積み重ねていく論文としての形式をとっているわけではない。しかし、本書の意義は史料および事例の提供にあり、村落レベルでの行政のあり方を明らかにする本書の史料は貴重である。加えて、本書は「外来マレー人」に着目することで、従来静態的に描かれることが多かったマレー社会論とは異なる在地社会像を提示している。キンタ溪谷地域は、19 世紀後半以降錫鉱業の発展とともに急速に開発の進んだフロンティア地域であり、この地域のマレー系住民にはスマトラからの移民が多い。本書はマンダイリン人という移民集団に焦点を当てることで、植民地下における社会変容の動的な側面を描いており、その点でも興味深い事例を提示していると思われる。(坪井祐司)

お詫び

JAMS News No.28(2004 年 2 月発行)の「法人類学からみたインドネシア」において、記事中で報告されている研究発表の報告者である高野さやかさんのお名前が落ちていました。これは、もとの原稿に書かれていた高野さんのお名前を編集の過程で誤って落としてしまったものであり、編集上のミスによるものです。特にご迷惑をおかけした高野さやかさんと執筆者の國谷徹さんをはじめ、読者のみなさまに深くお詫びいたします。読者のみなさまには、当該の記事中の報告者名として高野さやかさんのお名前を書き加えてくださいますようお願いいたします。

会報編集委員 山本博之